「滑稽句」を楽しみませんか（三）

金澤 健

俳句、川柳、滑稽句

滑稽句とは「身の回りのおかしみや滑稽を、構えず、自然体で感じ取り、そのまま五七五のリズムで詠む」ものと考えていますが、同時に季節感、季語を詠み込むことを否定するものではありません。これは川柳でも同じことで、季節感と滑稽を同時に詠んだ素晴らしい川柳句はいくつもあります。それぞれの季節を代表するような素晴らしい川柳をご紹介すると、

息一つ添へて土産の風車

勇敢に水着で歩く肉体美

月へ投げ草へ捨てたる踊りの手

大理石玄関口で寒く待ち

如何でしょうか。季語は俳句の世界の方々の専有物ではなく、すべての短詩型愛好者、もっと言えば、広く一般人にも開かれた言葉なのではないでしょうか。

また、「切れ」は、俳句独自のものであって、川柳、滑稽句にはないだ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ろう、と言われる方がおられるかもしません。私は、三者とも短型詩という韻文を標榜するからには、「切れはすべてに欠かせない」と考えます。ポイントは、「切れを作ることが目的ではない」ということです。即ち、「韻文はリズムが命」であり、一句にリズムを与える為に、句中、句末に「間を置く」ことが重要です。その間を置く為の「手段として切れを作る」のです。

詩は音楽によく例えられます。俳句も川柳も滑稽句も音楽であるならば、音符（十七文字）だけでなく、休止符(切れ)がなければ成り立ちません。休止符のない音楽などありえないのではないでしょうか。

川柳では、季節感や季語を詠むのも自由、詠まないのも自由が原則です。俳句でも、無季俳句は認められています。それならば、身の回りの滑稽に焦点を絞り、季節感、季語を同時に盛り込んでも、盛り込まなくても自由という滑稽句も認められていいのではないでしょうか。要は、無理に季語を用いようとして、滑稽感を台無しにすることは避けよう、という考えです。俳諧の三大精神の第一番目である「滑稽味を湛えた句を詠む」ことがなにより大事ではないかと思われるからです。滑稽句を、川柳と受け取るか、滑稽無季俳句と受け取るかは、句を読む方にお任せしていいのではないでしょうか。俳句か、川柳かに拘るよりも、「句で表現された滑稽をそのまま味わう」ことの方が、人生の楽しみを増してくれるのではないでしょうか。例えば、次の句（いずれも季語を含んでいるものを選びました）をご紹介したいと思います。先ずは、八木健滑稽俳句協会会長（俳句も川柳も作っておられます）の句から

春一番過去形で言う気象庁

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

アイロンをかけハンカチの過去を消す

一匹の蚊にストーカーされてゐる

次に、えもいわれぬ滑稽味を出される俳人（と私には思えてならない）池田澄子さんの句から、

永き夜の可もなく不可もなく可なり

風邪気味のたのしいのんべんだらりかな

よし分かった君はつくつく法師である

最後は、川柳界で一番季節感を出すのが上手い（と私が思っている）橘高薫風さんの句から、

恋人の膝は檸檬のまるさかな

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

四面楚歌故郷は豆の花の頃

いずれも、「俳句でも川柳でもいい。しみじみとした滑稽を味わえるのであれば、いいものはいい」という気持ちになって頂けましたでしょうか。究極的には、「滑稽という感動を分かち合うことにより、皆で人生を楽しむ」ことが出来れば、これ以上の冥利はないと考えております。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

最後に、滑稽句会メンバーの名(迷)句をあげておしまいとさせて頂きます。滑稽無季俳句と取られるか、川柳と取られるかは、読まれる方の判断、感性にお任せ致します。

怖れつつ深みにはまるのが男

紫陽花の吸い付く力キスの味

誰が為に引きし深紅のルージュかな

あわれ鵜の吐き出すばかり水深む

目じゃなくて下のほくろに恋してる

（完）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。